

## 音楽を楽しむ三つの場

池野 旬

「娯楽産業」という語を広義に解釈し、これを楽しむ対象者を基準としてその場を三つに分けてみた。

### 外国人の場

手ごろなタウン情報誌など望むべくもなく、在留外国人の情報源は口コミかあるいは英字新聞となる。タンザニアの英字日刊紙『デイリー・ニュース』(The Daily News)紙は大きくて日本の新聞大であるが、ページ数はわずか八ページしかない。その少ないページのうち、広告のスペースが全紙面の三分の一から二分の一を占め、最終ページのほぼ全面がスポーツ、芸能欄となっている。ダルエスサラームには映画館もあるが、インド映画とカンフー映画が主流で在留外国人が興味をもつものとはほど遠いために、同紙の映画覧は貧弱である。ちなみに、公営にしろ、民間にしろ、賭博場は存在しないので、広告はない。

国立博物館、アテネ・フランセ、ゲート・インスティテュート、米文化センター、ロシア文化センター等で不定期に開催される絵画展や演奏会は同紙で報じられ、盛況となる。このような催事の客の多くは、在留外国人である。たとえば、ロシア文化センターで催された管弦楽団の演奏会で、公演に先だって挨拶された文化担当大臣は、「文化交流のため」と切り出して一瞬絶句されたように、筆者には感じられた。一般に公開された無料の演奏会であるにもかかわらず、おそらく九割がたは外国人と一見してわかる聴衆が座席を占めていたためではなからうか。演劇好きのアマチュア劇団によって小劇場でときどき催される演劇も、演者も観客もともにヨーロッパ人が多い。コーラス、合奏グループもヨーロッパ人愛好家の集まりの域をでない。

『デイリー・ニュース』紙の広告には、ホテルのディナー・ショーの広告も少なくない。演奏されるのは、ヨーロッパ音楽でなく、アフリカン・ビートである。演奏者には、外国から出稼ぎに来るミュージシャンも数多い。最近では、カンダ・ボンゴマン（ザイル人。ただし本拠地はバリとのこと）、ボデイ・ボディアナ（ザイル人。ただし、ケニアからやってきた）、チコ・チカヤ（コンゴ人）等の名前が思い浮かぶ。タンザニアでは従来からリンガラと称されているザイル音楽がもてはやされていた。本家本元のザイル人演奏家が歓迎されることにならる。筆者の年若い調査助手によれば、カンダ・ボンゴマンの音楽はクワサ・クワサで、ボデ

イ・ボディアナはペサ・ペサで全然違うというのだが、筆者はこの方面にはとんと疎く、いずれも同じに聞こえてしまう。

タンザニア人のバンドも頑張っている。今いちばん人気があるのは、タトゥ・ナネであろう。スワヒリ語でタトゥは三、ナネは八のことで、由来はよくわからないが、やや奇妙な名前ではある。このバンドは、国際交流基金の招へいで、一九九二年後半日本を訪問している。筆者にも聞き分けられる別系統のタンザニア音楽がある。タアラブと称されているが、伝統楽器を用いた音曲である。歌手が演奏に合わせて歌うのであるが、どうもお経のように聞こえる。なんと悠長な音楽かと思っていたが、モダンなテンポの速いものもあることを最近ようやく知った。

### エリートの場合

デイナー・シヨはいわゆる中級のレストランでも開催されている。外国人からみれば高くはない入場料、飲物代、食事代であっても、公務員最低月額賃金から割り出せば、一日当たりの賃金がビールなら〇・六本、ソーダなら二・四本にすぎない国にあつては、相当の出費である。そのため、このような場所に入入りするのは、かなりの地位にある公務員や実業家の家族であろう。こちらでアジア人と総称されているインド・パキスタン系の住民は、まったくいいほど見かけない。

このような施設のひとつに、タザラ・ホステルがある。このホステルはタンザニアのダルエスサラームからザンビアのカプリ・ンポシまで延びるタザラ鉄道の関係者の宿泊施設であるが、

部外者も利用できる軽食堂が付設されている。昨年までタンザニアに三年間滞在した時のわが家は、このホステルの隣に位置していた。このホステルは都心からやや離れており、軽食堂のメニューも限られているために、日常の売上げはしれており、営業成績を伸ばすためには、なにか目玉が必要である。そこで、ライブ・ショーが開始された。タザラ・ホステルの常連は、タンザニア人バンド、MKグループである。他のバンドの場合と同様に、楽器はもちろんのこと、マイクやスピーカーも演奏家の自前である。

隣家のわが家ではただで演奏が楽しめるわけであるが、どうも度がすぎている。一九九一年に週休二日制が公務員に導入されて以来、政府関係機関や民間企業でも週休二日が広がっている。週末とは金、土、日の三日間を意味する。日曜日は翌日が出勤日のため夕方五時から夜十二時までで演奏が終るが、金、土には夜十時から朝四時までガンガン演奏している。さくさく寝てもいられない。楽しむどころか、これは「騒音」である。

タンザニアでは水力発電用のダムが異常渇水のために発電能力不足に陥って、一九九二年九月から全土で計画停電が実施され、筆者の九三年三月の帰国時にも継続中であり、同年四月から状況は改善されたという。この計画停電中には、ダルエスサラーム市でも、毎曜日を「昼間」午前五時～午後五時半、「夜間」午後五時半～十時半（のちに十二時近くまでに、さらに翌朝午前五時までに変更）の二期に分けて、地区ごとに交替で停電となっていた。多くの地区で

は、毎日「昼間」か「夜間」かのいずれかに停電していた。ところが、どういう手違いか、幸いなことにわが家近辺は、計画開始当初まったく停電がなかった。その結果、お隣のタザラ・ホステルでも毎週毎週MKグループが心おきなく演奏できていた。その後、わが家近辺でも徐々に停電するようになり、しばらくは静かな週末を楽しんでいたが、また突如として演奏が始まった。他のレストラン等で発電機を使ってディナー・ショーを継続しているので、タザラ・ホステルでも発電機を備えつけて、演奏を再開したのである。かつて日本では、石油ショックの折にテレビ局が深夜放送の自粛を行ったと思うが、そういう配慮は必要ないのだろうか。

いずれにしろ、演奏者も聴衆も朝の四時まで楽しむのだから、その体力たるや、相当のものである。客は聴衆に留まっていない。音楽が聞こえてくると、本当に自然に体が動き出すようで、一大ディスコ・パーティーと化する。リズム感も天性のものとしか思えないほど良く、ひとえに自分が楽しむために体を動かしているので、各人各様のスタイルで踊っている。

もっと楽しみたいとなれば、街角に店を並べているカセット屋に行けばよい。ミュージック・カセットを屋台のうえに広げて、安いヘッドホンつきのカセット・レコーダーを備え付けている。お目当ての演奏家のカセットを聞かせてもらって、気に入れば買っていく。そして、友達を呼んで、自宅で大ボリュームで再生し、簡便なディスコ・パーティーを開くという手順である。

## 庶民の場

タザラ・ホステルのようなレストラン、ホテルに気楽に出入りできない一般庶民が音楽を楽しめる場・方法として、結婚披露宴とラジオがあげられようか。

結婚披露宴といっても、日本のように格式ばったセレモニーではない。ご近所もくれば、遠縁の者もわんさとやってくる。田舎からやってきた親戚のおばさん連中が、奇声を発しながら伝統的なダンスを見せてくれる。それを見ているうちに、まわりも踊りの輪に巻き込まれていく。年齢層が高い人たちが音頭取りになるためか、レストランやホテルで演奏されている近代的な音楽よりは、伝統的な音楽が多くなる。

ラジオは、まさに流行の音楽を楽しめる神器である。タンザニア「連合共和国」は、アフリカ大陸にある本土部分のタンガニーカ政府と、インド洋上のザンジバル島ほかの数島を擁するザンジバル政府から成る連合国家であり、ザンジバル政府はテレビ局を持っているが、タンガニーカ政府にはない。それ故、タンザニア本土では、ラジオが貴重な情報源であり、娯楽の源でもある。高くて生演奏を聞きにいけないかった外国人演奏家やタンザニアの著名なバンドの演奏を気楽に楽しめる。学校帰りの小学生が、カンダ・ボンゴマンを話題にできるわけである。ラジオのもう一つの人気番組は、サッカーの実況放送である。ファンの多い二強チームはスインバとヤンガで、スインバはスワヒリ語でライオンのこと、ヤンガはヤング・アフリカンの略称である。日本でもJリーグの熱狂的なファンがいるようだが、いずれかのチームの旗を車

につけてあったり、家の前の竿に掲げてあったりする。それまで気難しかった老人が、同じチームのファンとわかって、青年と談笑したりしている。サッカーは単に「聞く」だけでなく、子供たちが手製のボールで楽しめる、最も普及したスポーツでもある。

(いけの じゅん／アジア経済研究所地域研究部)